

第3章 筑波大学生のスポーツ活動選好分析

本章は、学生のスポーツ動機の構造、スポーツ活動への反応プロセス、パーソナリティとスポーツ活動選好の関係、を分析しようとするものである。

第1節 スポーツ動機の構造分析

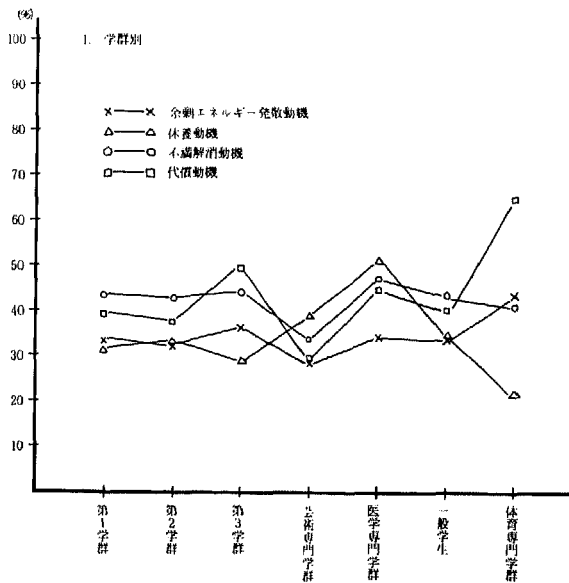
本節では学生のスポーツ動機構造をさぐる。

§1. 学生のスポーツ動機構造

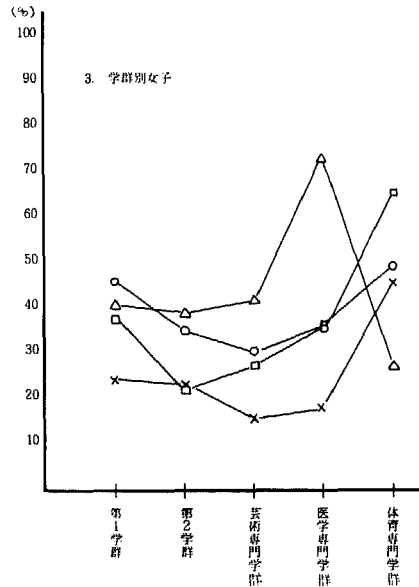
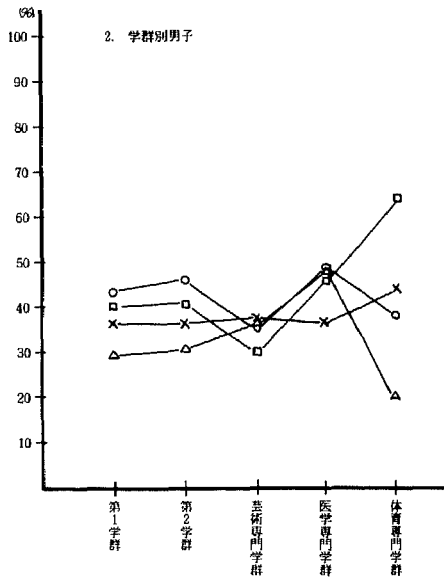
スポーツ動機をさぐるため、5つの設問を提示して被検者に自己診断させた(Q15:注1)。各設問に対して「非常によくある」「よくある」と答えたものの割合を示したのが図18、図19である。

(1) 専攻ごとにみたスポーツ動機 (図18-1.2.3)

図18 専攻別スポーツ動機



第1学群学生全体では不満解消動機が42.9%と最も高い。次いで代償動機38.7%、余剰エネルギー発散動機33.3%、休養動機31.2%、の順である。第1学群男子学生は全体と同順で、それぞれ42.3%、39.1%、35.8%、28.6%である。第1学群女子学生は不満解消動機45.3%について休養動機40.5%が高く、続いて代償動機37.4%、そして余剰エネルギー発散動機24.3%の順である。



第2学群学生全体では不満解消動機の42.0%が最も多く、代償動機36.9%、休養動機32.5%、余剰エネルギー発散動機31.9%と続く。第2学群男子学生では不満解消動機45.2%が最も高い。次が代償動機の39.5%、そして余剰エネルギー発散動機35.6%、休養動機30.0%である。第2学群女子学生では休養動機が38.3%で最も高い。次いで不満解消動機34.5%が高い。余剰エネルギー発散動機と代償動機はほぼ同率で低く、それぞれ23.3%、22.3%である。

第3学群全体では代償動機が48.3%で最も高く、不満解消動機43.5%、余剰エネルギー発散動機36.2%、休養動機28.3%と続く(注2)。

芸術専門学生全体で高いのは休養動機38.1%である。次が不満解消動機で32.7%、代償動機と余剰エネルギー発散動機はほぼ同率でそれぞれ28.6%、28.0%である。芸術専門男子学生は余剰エネルギー発散動機、休養動機、不満解消動機がほぼ同率で高く、それぞれ、36.7%、35.7%、34.7%である。代償動機は29.6%とやや低い。芸術専門女子学生は休養動機が41.4%で最も高い。次いで不満解消動機30.0%、代償動機27.1%が続き、余剰エネルギー発散動機は15.7%で最も低い。

医学専門学生全体では休養動機が50.7%で最も高い。不満解消動機46.4%、代償動機44.1%がこれに次ぎ、余剰エネルギー発散動機は33.9%で最も低い。医学専門男子学生は不満解消動機47.5%、休養動機47.4%、代償動機44.1%が高く、余剰エネルギー発散動機が36.0%で最も低い。医学専門女子学生は休養動機が71.8%と非常に高い。不満解消動機、代償動機はいずれも35.9%である。余剰エネルギー発散動機は18.0%で最も低い。

体育専門学生全体では代償動機が63.6%と非常に高い。余剰エネルギー発散動機と不満解消動機はほぼ同率で比較的高く、それぞれ、43.2%、40.8%である。休養動機は21.8%で最も低い。体育専門男子学生は全体と同じ排列と傾向を示し、それぞれ63.2%、42.5%、37.7%、19.8%である。体育専門女子学生は、不満解消動機と余剰エネルギー発散動機の順が入れかわっているが、男子同様の傾向を示し、それぞれ64.6%、48.8%、45.1%、26.8%である。

体育専門学生を除く一般学生全体をみると不満解消動機が42.4%で最も高い。次いで代償動機の39.0%が続き、休養動機と余剰エネルギー発散動機はほぼ同率で、それぞれ33.6%、32.9%である。

これらの結果は次のようにまとめることができる。

① 専攻別全体をみると、一般に不満解消動機が高く、余剰エネルギー発散動機と休養動機が低い。

② 芸術専門学生間、ならびに医学専門学生間では休養動機が最も高く、医学専門学生の値は専攻別にみた休養動機の最高値である。

③ 体育専門学生間にあっては、他の専攻学生間で低い余剰エネルギー発散動機が高く、専攻別での最高値を示している。また、代償動機が非常に高く、専攻別の最高値であり、休養動機に非常に低く、同様に最低値である。

④ 男子学生についてみると、余剰エネルギー発散動機の専攻間の差は小さい。僅かに体育専門学生が高い。

⑤ 第1学群学生と第2学群学生はすべての動機についてほぼ同じ値を示している。

⑥ 芸術専門学生のスポーツ動機は他に比べて低く、代償動機、不満解消動機は男子学生間の最低値である。

⑦ 医学専門学生間では、余剰エネルギー発散動機は他とほぼ同率を示しているが、その他の動機がより高い。他の3つはほぼ同率であり、このうち不満解消動機と休養動機はいずれも男子学生間の最高値である。

⑧ 体育専門学生間では代償動機が非常に高く、男子学生間の最高値となっている。また、休養動機は非常に低く、男子学生間の最低値となっている。

⑨ 女子学生についてみると、休養動機が高く、余剰エネルギー発散動機が低いところ傾向がある。また、不満解消動機も比較的高い値を示している。この傾向はとくに医学専門学生に顕著であり、休養動機の比率はすべての専攻、男女、各動機を通じて最高の値である。

⑩ 体育専門学生は代償動機が非常に高く、休養動機が非常に低い、という体育専門男子学生と同様の傾向を示している。

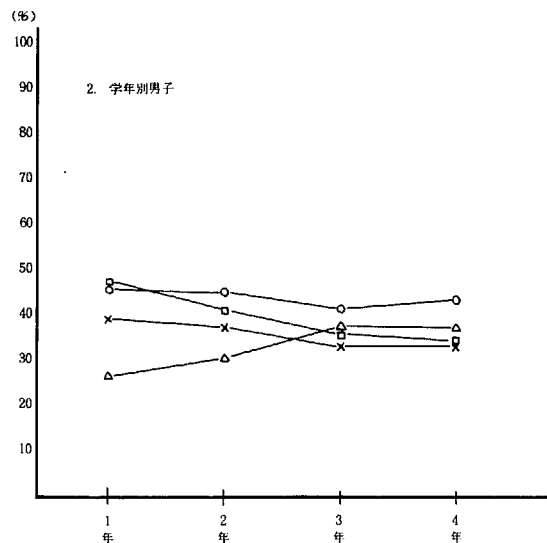
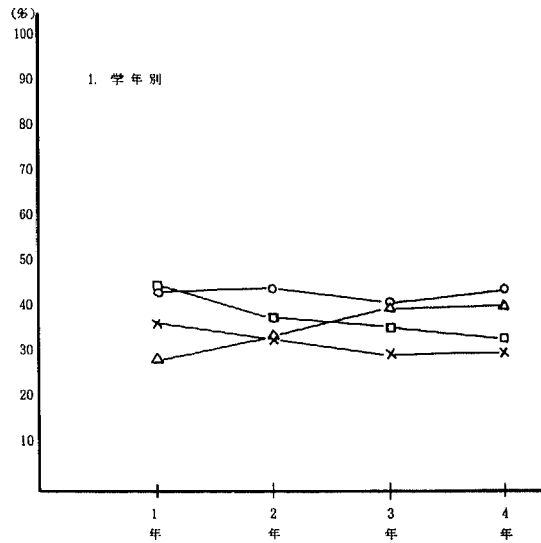
(2) 学年毎にみたスポーツ動機 (図19-1.2.3)

体育専門学生を除く、一般学生のスポーツ動機を学年別にみた結果は次のとおりである。

1年生全体では代償動機と不満解消動機がほぼ同率で高く、それぞれ44.4%、42.9%である。次いで余剰エネルギー発散動機が36.2%で、休養動機は28.3%と低い。1年生男子は1年生全体と同様の傾向で、それぞれ46.7%、45.0%、38.5%、26.1%である。1年生女子では代償

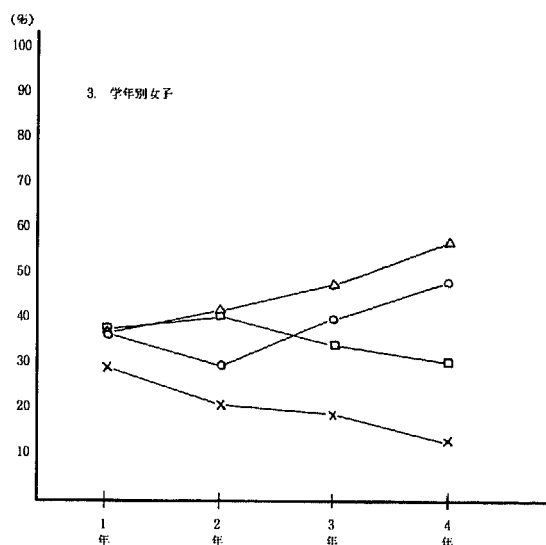
動機、休養動機、不満解消動機がほぼ同率で、それぞれ37.1%、35.8%、35.8%である。余剰エネルギー発散動機は26.1%と低い。

図19 学年別スポーツ動機



2年生全体では、不満解消動機が43.2%で最も高く、次いで代償動機の37.5%が高い。休養動機と余剰エネルギー発散動機はほぼ同率で、それぞれ33.3%、32.7%である。2年生男子では

不満解消動機，代償動機，余剰エネルギー発散動機の順に高く，休養動機は低い。これらの比率は，それぞれ44.8%，40.7%，36.9%，30.2%である。2年生女子では，休養動機，代償動機がほぼ同率で高く，それぞれ41.6%，38.4%である。不満解消動機は28.6%とやや低く，余剰エネルギー発散動機は21.0%と非常に低い。



3年生全体では不満解消動機と休養動機がほぼ同率で高く，それぞれ40.7%，39.4%である。次いで代償動機が35.0%であり，余剰エネルギー発散動機は29.4%で最も低い。3年生男子では4つの動機間の差は小さい。不満解消動機40.9%，休養動機37.0%，代償動機35.1%，余剰エネルギー発散動機32.6%の順である。3年生女子では4つの動機間の差が比較的大きい。休養動機が最も高く，47.3%である。不満解消動機39.6%，代償動機34.4%と続き，余剰エネルギー発散動機は18.8%でかなり低い。4年生全体では，不満解消動機43.1%，休養動機39.7%，代償動機32.8%，余剰エネルギー発散動機29.8%の順である。4年生男子では，不満解消動機が42.3%で最も高く，次いで休養動機が36.9%で高い。代償動機と余剰エネルギー発散動機はほぼ同率で，それぞれ32.8%，29.8%である。4年生女子は4つの動機間の差が非常に大きい。休養動機が最も高く，56.5%である。次いで不満解消動機が47.8%で高く，代償動機は30.4%である。余剰エネルギー発散動機は13.0%で非常に低い。

これらの結果は次のようにまとめられるであろう。

- ① 各学年全体をみると，各学年を通して不満解消動機が高い。
- ② 代償動機ならびに余剰エネルギー発散動機は学年がすすむにつれて低下している。

- ③ 休養動機は学年がすすむにつれて上昇している。
- ④ 男子についてみると、各学年を通して不満解消動機が高い。
- ⑤ 代償動機ならびに余剰エネルギー発散動機は学年が進むにつれて低下している。
- ⑥ 休養動機は学年がすすむにつれて上昇している。
- ⑦ ⑤および⑥の傾向は全体の場合にもみられるが、男子の場合、より明瞭である。
- ⑧ 女子についてみると、各学年を通して休養動機が高く、しかも学年がすすむにつれて上昇し、4年生においては学年、男女、すべての動機間の最高値を示している。
- ⑨ 不満解消動機は、各学年を通じて比較的高い値を示し、2年生で一度低下しているものの、学年がすすむにつれてやや上昇している。一方、代償動機は、2年生で一度上昇しているものの、学年がすすむにつれて僅かずつ低下している。
- ⑩ 余剰エネルギー発散動機は各学年を通して非常に低く、しかも学年がすすむにつれて低下し、4年生においては学年、男女、すべての動機間の最低値を示している。

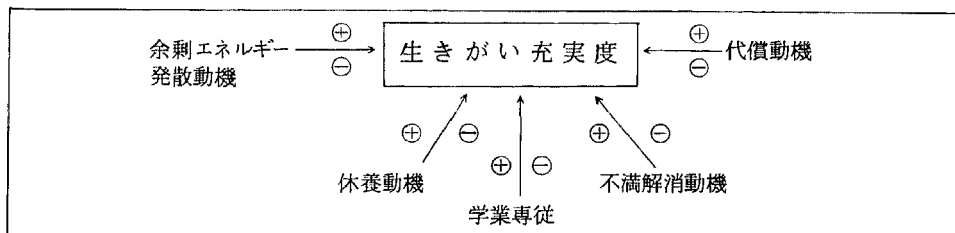
以上の結果から次のことがいえる。

- ① 男女を通して、学年、専攻を問わず、不満解消動機は高い値を示している。
- ② 休養動機は、専攻別にみると一般に低く、とくに体育専門学生は、男女いずれも低い値を示している。しかし、医学専門学生にあっては男女いずれも非常に高く、女子は顕著である。また、学年別にみると、男女いずれも学年がすすむにつれて上昇する傾向を示し、女子において顕著である。女子にあっては学年を問わず、体育専門学生を除いて非常に高い値を示している。
- ③ 余剰エネルギー発散動機は、女子の間で低く、学年別にみると、学年がすすむにつれて低下する。しかし、専攻別にみると、一般学生間の差は明瞭ではない。ただし、体育専門学生は男女を問わず、比較的高い値を示している。
- ④ 代償動機は、専攻別にみると、比較的高い値を示すが、女子の間では低い。しかし、体育専門学生の場合はいずれも非常に高い値を示している。また、学年別にみると、一般に高い値を示すが、学年がすすむにつれて低下している。

§ 2. スポーツ動機と生きがい充実度

ここでとりあげているスポーツ動機は、労働と余暇に関するものを応用しているが、学業に対して代替的でもあり、補完的であるスポーツ動機は生きがい充実度に対しても、プラスの影響を及ぼしたり、マイナスの影響を及ぼしたりすることになる。これをモデル化したのが図20である。

図20 各スポーツ動機が生きがい充実度に与える影響



ここでは生きがい充実度を被説明変量，4つのスポーツ動機に学業専従を加えて説明変量とし，林の数量化理論Ⅱ類によって分析した。結果は表13に示すとおりである。

表13 スポーツ動機が生きがい充実度に与える影響度
(林の数量化理論Ⅱ類)

(一般男子学生)

アイテム	カテゴリー	$\bar{x} - \bar{y}$	レンジ	標準化(%)
1. 余剰エネルギー動機	な いる あ る	-0.18634 0.31908	0.50543	27.0
2. 休養動機	な いる あ る	-0.05450 0.11955	0.17405	9.3
3. 不満解消動機	な いる あ る	0.14520 -0.18150	0.32670	17.4
4. 代償動機	な いる あ る	-0.27359 0.50028	0.77387	41.3
5. 学業専従 (スポーツどころではない)	な いる あ る	-0.02020 0.07281	0.09301	5.0
			1.87306	100.0

N = 198 正判別率 64.6 %
η 0.34470

(一般女子学生)

アイテム	カテゴリー	$\bar{x} - \bar{y}$	レンジ	標準化(%)
1. 余剰エネルギー動機	な いる あ る	0.08629 -0.34516	0.43144	26.0
2. 休養動機	な いる あ る	-0.04005 0.05418	0.09423	5.7
3. 不満解消動機	な いる あ る	0.00745 -0.00823	0.01568	0.9
4. 代償動機	な いる あ る	0.08534 -0.17725	0.26259	15.8
5. 学業専従 (スポーツどころではない)	な いる あ る	-0.23589 0.62189	0.85778	51.6
			1.66172	100.0

N = 80 正判別率 57.5 %
η 0.1894465

(体育専門男子学生)

アイテム	カテゴリー	$\bar{x} - \bar{y}$	レンジ	標準化(%)
1. 余剰エネルギー動機	な いる あ る	0.08962 -0.10954	0.19916	10.2
2. 休養動機	な いる あ る	0.05227 -0.26941	0.32169	16.5
3. 不満解消動機	な いる あ る	0.09867 -0.15597	0.25464	13.1
4. 代償動機	な いる あ る	-0.51070 0.30642	0.81712	42.0
5. 学業専従 (スポーツどころではない)	な いる あ る	0.04848 -0.30411	0.35260	18.1
			1.94521	100.0

N = 80 正判別率 63.8 %
η 0.360763

(体育専門女子学生)

アイテム	カテゴリー	$\bar{x} - \bar{y}$	レンジ	標準化(%)
1. 余剰エネルギー動機	な いる あ る	0.16508 -0.23111	0.39619	18.8
2. 休養動機	な いる あ る	0.09691 -0.24514	0.34205	16.3
3. 不満解消動機	な いる あ る	-0.08878 0.10146	0.19023	9.0
4. 代償動機	な いる あ る	-0.39477 0.19738	0.59215	28.2
5. 学業専従 (スポーツどころではない)	な いる あ る	-0.07765 0.50475	0.58241	27.7
			2.10303	100.0

N = 60 正判別率 55.0 %
η 0.259

この結果から次のことが言えるであろう。

① 一般男子学生：生きがい充実度に対して、スポーツ動機が「よくある」と答えたものでプラスの影響を及ぼしているのは余剰エネルギー発散動機、休養動機、代償動機、学業専従である。このうち、生きがい充実度に対する影響度が大きいのは代償動機であり、次いで余剰エネルギー発散動機が大きい。

一般男子学生は、学業以外の自己実現の手段としてスポーツを実践することで生きがい充実度が高くなり、それに必要な活力・エネルギーを有している。

② 一般女子学生：生きがい充実度にプラスに影響するのは休養動機のみであるが、学業専従だけでも生きがい充実度は高い。生きがい充実度に対する影響度が高いのは学業専従と余剰エネルギー発散動機であるが、余剰エネルギー発散動機の「よくある」という答えは生きがい充実度にマイナスに影響している。代償動機の「よくある」という答えも生きがい充実度に対してプラスには影響していないことも合わせ、一般女子学生は、主として学業で生きがいが高まり、軽スポーツを実施して休養し、学業のための活力を取り戻している。

③ 体育専門男子学生：生きがい充実度にプラスに影響しているのは代償動機のみである。他のスポーツ動機が生きがい充実度にマイナスに影響し、学業専従もまた、マイナスに影響していることから、体育専門男子学生は、学業としてのスポーツばかりでは自己の人間形成に不十分とみて、日常的なスポーツを実践することにより生きがい充実度が高くなっていると見做すことができる。

生きがい充実度に対するプラス・マイナスにかかわらず、影響するのは代償動機、学業専従、休養動機である。

④ 体育専門女子学生：体育専門男子学生に比べると、体育専門女子学生は学業専従が生きがい充実度にプラスに影響しているのが特徴である。学業専従だけでも生きがい充実度に対する影響度は高いが、代償動機もプラスで高い影響を及ぼしている。このことから、体育専門女子学生は、学生生活を送ること自体ですでに生きがいを感じ、その学業としてのスポーツ生活や研究生活の不十分な点をスポーツで補完していると解釈することができる。

⑤ 男女間の比較：生きがい充実度に対してプラスに、かつその影響度が高いのは、男子では代償動機であり、女子では学業専従である。このことは、それぞれの特徴であり、互いの差である。

第2節 スポーツ種目の選好パターン

本節では、学生のスポーツ種目の選好を一連の反応プロセスと捉えて分析する。分析には次の5つの指標を用いた（Q2の1～5）。

- ① 知覚率（Awareness, Aw）
 - ② 知識率（Knowledge, K）
 - ③ 興味率（Interest, I）
 - ④ 欲求率（Desire, D）
 - ⑤ 活動率（Action, Ac）
- } 認知的次元
感情的次元
動因次元
活動次元

表14、表15はそれぞれ、各指標について比率の高い順に10種目ずつ選んだものである。

これらの表からは、知覚率および知識率の高い種目は活動率も比較的高く、一方、興味率、欲求

率が高い種目はその他の指標の値は低く、表中に現われないものが多いことがわかる。

表14 各指標毎の上位10種目

(男子)

専門	指標 順位	Awareness	Knowledge	Interest	Desire	Action
		1	野 球	バレーボール	スキー	スキー
2	バレーボール	バスケットボール	野 球	硬式テニス	バレーボール	
3	相 撲	野 球	サッカー	ゴルフ	サッカー	
4	ボクシング	相 撲	バレーボール	野外活動	水 泳	
5	バスケットボール	陸上競技	バスケットボール	サーフィン	野 球	
6	ラグビー	サッカー	アメリカンフットボール	アイススケート	陸上競技	
7	体操競技	柔 道	硬式テニス	ヨット	ソフトボール	
8	ゴルフ	ハンドボール	ラグビー	野 球	ハンドボール	
9	陸上競技	ソフトボール	水 泳	ラグビー	ラグビー	
10	サッカー	ボクシング	ゴルフ	サッカー	柔 道	
一般 男子 学生	1	野 球	野 球	野 球	スキー	野 球
	2	相 撲	バレーボール	硬式テニス	硬式テニス	ソフトボール
	3	バレーボール	バスケットボール	スキー	ゴルフ	卓 球
	4	サッカー	卓 球	サッカー	ライフル射撃	バレーボール
	5	ボクシング	ソフトボール	バレーボール	野 球	バスケットボール
	6	硬式テニス	相 撲	アメリカンフットボール	登 山	サッカー
	7	ゴルフ	サッカー	ゴルフ	ヨット	水 泳
	8	スキー	ボウリング	アイススケート	アイススケート	バドミントン
	9	体操競技	硬式テニス	ラグビー	野外活動	ボウリング
	10	ラグビー	柔 道	バスケットボール	オリエンテーリング	サイクリング

表15 各指標毎の上位10種目

(女子)

専門	指標 順位	Awareness	Knowledge	Interest	Desire	Action
		1	野 球	バレーボール	硬式テニス	スキー
2	バレーボール	バスケットボール	バレーボール	硬式テニス	バスケットボール	
3	体操競技	野 球	体操競技	野外活動	水 泳	
4	バスケットボール	陸上競技	バスケットボール	アイススケート	バドミントン	
5	相 撲	ボウリング	スキー	ダンス	卓 球	
6	陸上競技	卓 球	水 泳	バスケットボール	ハンドボール	
7	硬式テニス	ハンドボール	アイススケート	水 泳	体操競技	
8	ゴルフ	体操競技	ダンス	バレーボール	陸上競技	
9	スキー	硬式テニス	野 球	登 山	ソフトボール	
10	サッカー	水 泳	野外活動	オリエンテーリング	硬式テニス	
一般 女子 学生	1	野 球	バレーボール	硬式テニス	硬式テニス	バレーボール
	2	バレーボール	バスケットボール	スキー	スキー	バスケットボール
	3	相 撲	野 球	アイススケート	アイススケート	卓 球
	4	体操競技	卓 球	バレーボール	ダンス	バドミントン
	5	硬式テニス	ソフトボール	野 球	卓 球	水 泳
	6	水 泳	ボウリング	バドミントン	バドミントン	軟式テニス
	7	バスケットボール	バドミントン	卓 球	オリエンテーリング	ソフトボール
	8	スキー	水 泳	体操競技	野外活動	硬式テニス
	9	アイススケート	相 撲	バスケットボール	馬 術	スキー
	10	ゴルフ	硬式テニス	水 泳	水 泳	アイススケート

図21 知覚率第1位の種目の反応プロセス

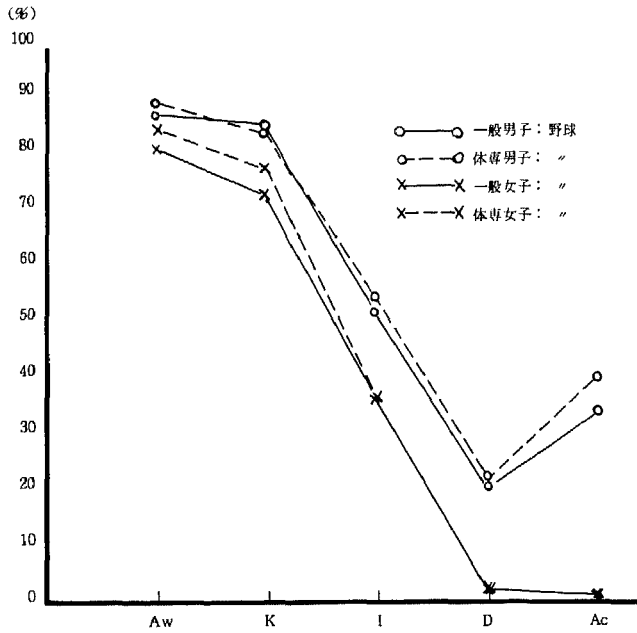


図22 知識率第1位の種目の反応プロセス

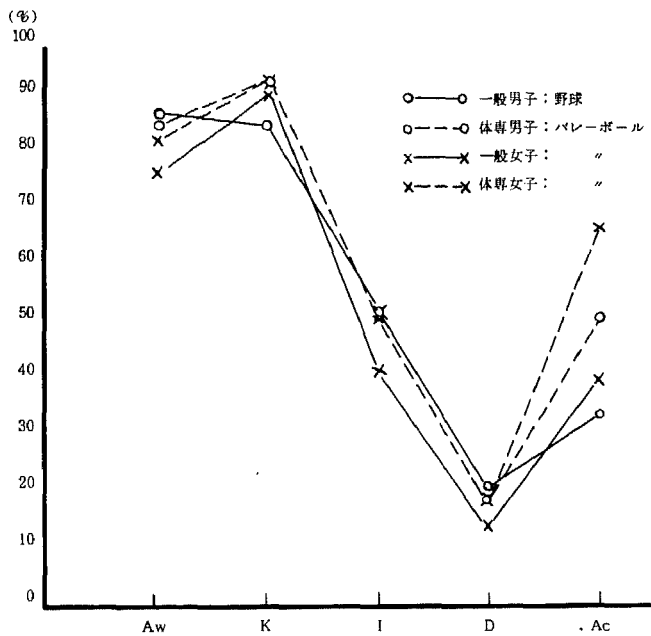


図23 興味率第1位の種目の反応プロセス

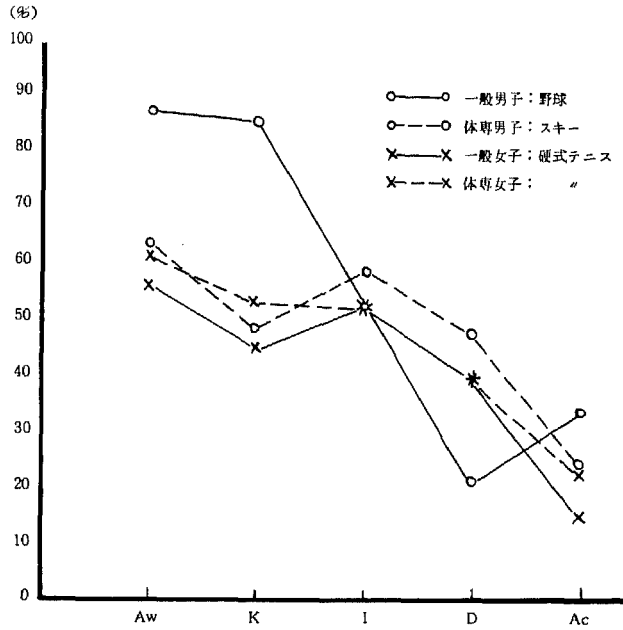


図24 欲求率第1位の種目の反応プロセス

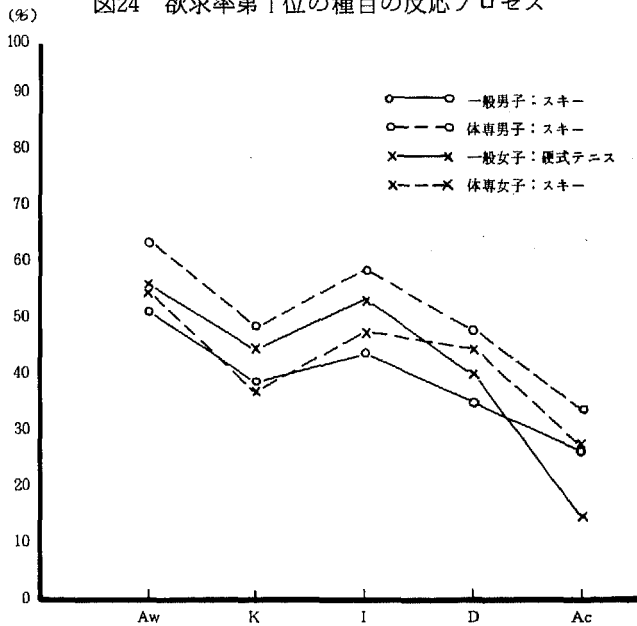
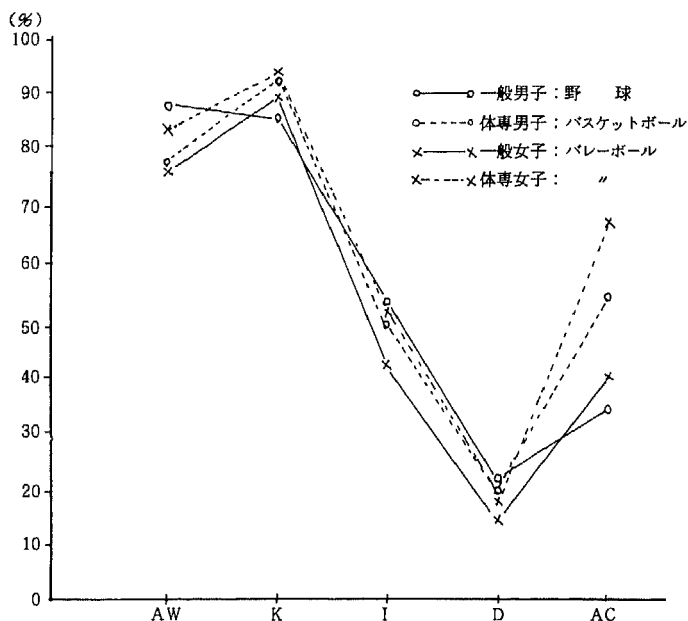


図21から図25までは、各指標で1位にある種目の反応プロセスを示している。ここに現われた種目は、スキーを除いて、球技である。また、1位である延べ20種目は野球、バレーボール、バスケットボール、硬式テニス、スキーの5種目に還元される。これらの種目には、例外もあるが、マス

メディアを通じた報導の機会と期間が多く、長いこと、用具購入が比較的容易であること、初等・中等教育における主要な教材に含まれていること、などに共通性がみられる。

図25 活動率第1位の種目の反応プロセス



これら5種目については、大きく2つのパターンに分けることができる。ひとつは知覚率、知識率が非常に高く、活動率も比較的高い。しかし欲求率が活動率を下回っているものである。野球、バレーボール、バスケットボールはこのパターンである。もうひとつは知覚率が比較的高く、活動率に向ってゆるい下降を示すが、知識率が落ち込んでいるものである。スキー、硬式テニスはこのパターンである。

学生に提示した53種目すべてについて、それぞれの反応プロセスをみると、次の5つのパターンに分けることができる。

① I型（マスコミ依存型）

マスメディアを通しての知覚率が高く、活動率に向けて緩やかに下降する傾向をもつタイプである。この型は、さらに3つに分けられる。

○ I-1型（マスコミ依存開発期型）—図26

知覚率がまだ低く、したがってその他の指標の割合も低い。このタイプは、ある種の情報を与えれば全体が引きあげられて活動率も高まると思われるものである。このタイプにはレスリング*、フェンシング*、ホッケー*、フィッシング*、自転車競技*が含まれる（*印は本学正課体育では開講されていない種目。以下、同様）。

○ I-2型（マスコミ依存成長期型）—図27

知覚率がI-1型に比べて高く、興味率、欲求率、活動率もそれにしたがって高いものである。これにはスキー、スケート、アメリカン・フットボール*の3種目が含まれる。

○ I-3型(マスコミ依存成熟期型) — 図28

I型の中では知覚率が最も高いが、その他の指標が高められていないタイプである。このタイプは、知覚的情報を与えてもこれ以上活動率が上がる見込みのないものである。これにはボクシング*、ボウリング、相撲*、ゴルフ、軟式テニス*の5種目が含まれる。

図 26

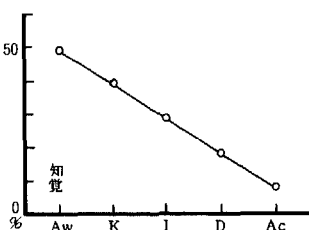


図 27

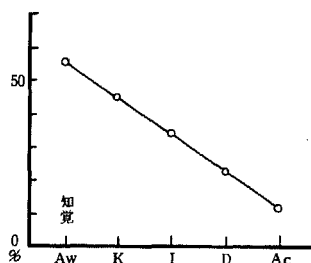
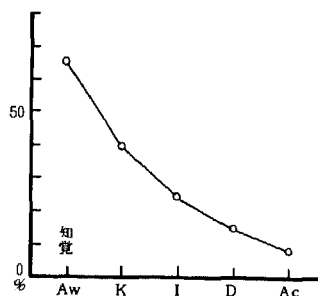


図 28



② II型(カリキュラム延長型) — 図29

知識率と活動率が他より高く、欲求率が低いものである。このタイプには中・高等学校時代に履修した種目が多い。これにはソフトボール、ハンドボール、硬式テニス、バドミントン、卓球、剣道の6種目が含まれる。

③ III型(カリキュラム延長—マスコミ依存型) — 図30

II型に比べて知識率が高く、I型に比べて活動率が高い。I型とII型の混合と考えられる。このタイプは欲求率が低いにもかかわらず、活動率が高いのが特徴である。これには野球、サッカー、ラグビー、陸上競技、バレーボール、バスケットボール、体操競技・トレーニング、柔道、水泳の9種目が含まれる。

④ IV型(カリキュラム・アウト型) — 図31

興味率が高く、山型の図型を現わすタイプである。これには次の22種目が含まれる。野外活動*、登山*、ワンダーフォーゲル*、ハンティング*、アーチェリー、ハンググライダー*、ヨット、サーフィン*、ウィンドサーフィン、水上スキー*、水球*、ダンス、ローラースケート*、射撃、馬術*、空手、弓道、古武道(槍術、杖道、居合など)*、拳法*、合気道*、身心鍛練法。

⑤ V型(その他)

これにはサイクリング、オリエンテーリング、ウェイトリフティング*、なぎなた*の4種目が含まれる。

ここで用いた分析手法はマーケティングの分野でよく利用されるが、II~V型のような型は普通みられず、スポーツ種目選好に特有のものである。

図 29

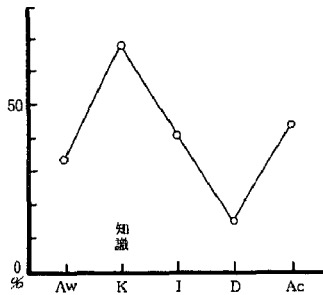


図 30

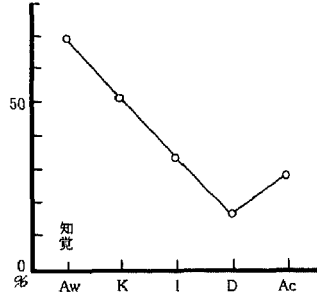
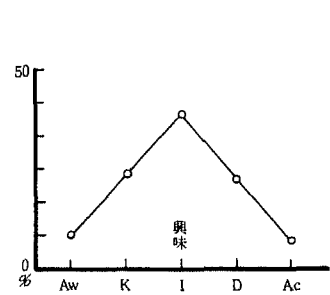
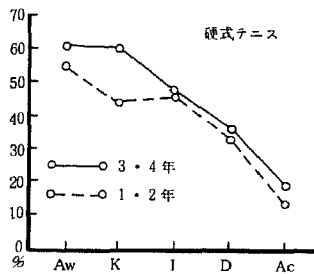


図 31



より多くの情報を得たのちに、反応プロセスに何らかの変化があれば、これを何らかの学習効果があったと考えることができる。図32は1・2年生と3・4年生の反応プロセスを比較した例である。

図 32



上述した意味の学習効果は次の18種目の上に現われ、それ以外はほとんどかわりなし、あるいは効果なしである。ゴルフ、硬式テニス、ダンス（以上は6%以上の効果）、野球、ボウリング、体操競技・トレーニング、水泳、ヨット、ボート、サイクリング、アーチェリー、スキー、スケート、弓道、身心鍛練法（以上は5%以上の効果）。

第3節 パーソナリティとスポーツ種目選好の関連分析

本節は、個人の心理的資質はその個人のスポーツ種目選好と関連があるか、あるとすればどのように関連するのかを分析しようとするものである。

テストは、パーソナリティ特性を表わすアイテムを99個提示し、任意選択させた(Q1)。

表16は各アイテムを選択したものの割合を、一般学生と体育専門学生に分けて集計したものである。

一般学生と体育専門学生間の差が10%以上であるものは次の14項目である。健康的（一般32.3%、体育61.8%、以下同順）、指導的（13.5%、31.1%）、男性的（14.3%、30.1%）、

表16 正課体育に関する調査 Q1への回答の百分比

(%)

建設的	親切	強い	懐疑的	責任感がある	支配的	外向的	思いやりがある	向上心旺盛	のんき
20.7 21.3	41.7 53.7	11.3 15.9	28.5 15.0	42.7 51.7	12.3 15.0	20.8 30.4	38.2 47.3	27.2 25.7	46.1 50.5
誠実	批判的	ロマンチック	憶病	指導的	慎重	自分勝手	理性的	上品	素直
38.7 44.9	29.9 22.8	38.6 39.5	30.9 21.6	13.5 31.1	43.5 37.5	27.2 20.1	29.0 26.2	10.9 11.8	44.2 49.8
鈍感	開放的	競争的	社交的	男性的	病弱	昌険的	陽気	努力型	怠惰
16.9 14.2	28.0 33.3	22.3 25.0	20.9 30.9	14.3 30.1	5.2 3.4	17.7 19.1	36.2 52.2	30.8 33.8	32.3 23.0
個性的	楽観的	勝負ごとが好き	エネルギー	主体的	明るい	依存的	主観的	ヒステリック	自身家
27.7 32.6	42.4 46.3	21.7 32.6	12.5 20.8	20.4 19.1	37.3 51.7	28.3 23.0	26.1 24.0	6.4 5.6	15.8 14.5
無責任	温和	積極的	不安定	意欲的	反抗的	献身的	ユーモラス	無口	協調的
7.9 5.6	46.2 52.9	18.7 27.2	30.6 20.8	19.5 24.5	14.5 17.2	17.9 25.0	29.5 40.4	20.3 20.1	39.3 40.9
攻撃的	内向的	信じ易い	敏感	服従的	容観的	忍耐強い	挑戦的	感覚的	健康的
9.8 14.0	32.7 23.8	34.3 41.4	31.8 32.6	7.3 8.8	20.1 19.6	26.9 35.3	11.8 14.5	31.9 24.5	32.3 61.8
勤勉	神経質	粗野	暗い	勇敢	衝動的	頼りない	良心的	克己型	劣等感
16.9 18.1	44.8 41.4	12.5 11.3	6.6 4.7	5.7 13.2	29.8 28.4	20.6 14.0	39.8 43.6	11.6 17.2	25.4 20.1
忠実	情熱的	無気力	大胆	女性的	閉鎖的	厳しい	自己中心的	強情	創造的
18.5 23.3	20.7 25.7	15.9 7.4	13.6 14.5	8.6 6.9	14.9 13.2	9.8 12.0	29.9 26.7	22.6 32.1	24.4 21.3
協力的	活動的	進歩	保守的	冷静	勝負強い	熟慮型	たくましい	やさしい	探究心旺盛
28.6 39.0	21.6 43.6	20.9 22.5	30.1 25.5	21.7 16.9	10.4 17.9	26.6 22.8	6.5 18.6	35.5 46.8	24.2 16.9
強健	感情的	孤独	友好的	頼もしい	自己啓発型	理想主義者	現実主義者	非観主義者	
6.1 16.4	30.1 35.8	23.7 22.5	37.9 47.5	5.0 14.2	14.5 12.3	45.6 37.7	31.6 29.2	14.3 8.1	

注：各項目下の左欄は一般学生 ALL、右欄は体育専門学生 ALL の数値である。

一般学生 ALL N=3159

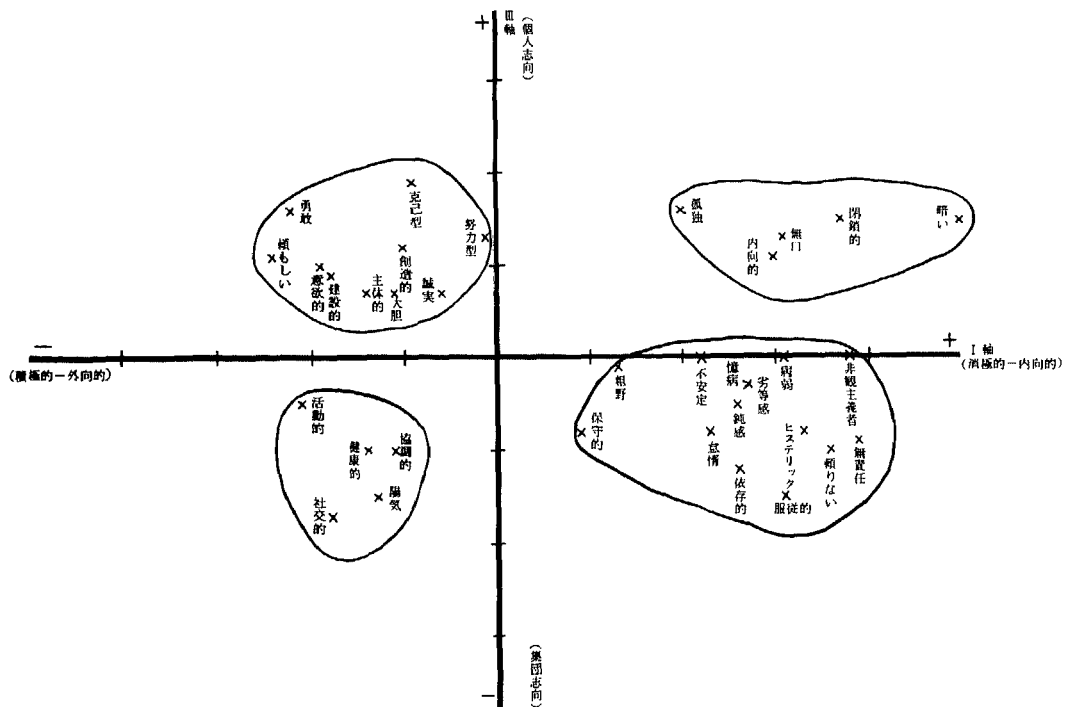
体育専門学生 ALL N=408

陽気 (36.2%, 52.2%), 以上は15%以上の差である。協力的 (28.6%, 39.0%), 強健 (6.1%, 16.4%), 活動的 (21.6%, 43.6%), 親切 (41.7%, 53.7%), 社交的 (20.9%, 30.9%), 懐疑的 (28.5%, 15.0%), 明るい (37.3%, 51.7%), ユーモラス (29.5%, 40.4%), たくましい (6.5%, 18.6%), やさしい (35.5%, 46.8%), 以上は10~15%の差である。

このうち、一般学生が体育専門学生を上回るのは懐疑的のみである。

図33は、99項目への反応を林の数量化理論Ⅲ類で処理した結果である。

図33 パーソナリティの空間布置



I軸-Ⅲ軸間にやや明瞭なパターンが現われている。I軸は消極的・内向的-積極的・外向的、Ⅲ軸は個人志向-集団志向の軸と考えられる。4つの象限にそれぞれ1つのまとまりをつくることのできる。

数量化理論で処理する前に、パターンを予想してその代表的な項目を選び、これとスポーツ種目選好とをクロス集計したが、スポーツ種目とパーソナリティ特性は明瞭に現われていない (表17)。

表17 パーソナリティとスポーツ種目とのクロス集計

(単位:人)

	合気道	アイススケート	サッカー	アメリカンフットボール	ウインドサーフィン	ウスイトリフライング	オリエンテーリング	空手道	弓道	剣道	拳法	硬式テニス	古武道(槍・棒・居合)	ゴルフ	サイクリング	サーフィン	水泳(シンクロノイズドスイミング・とびこみを含む)	水球	水上スキー	スキー	心身鍛錬法	相撲	自転車競技	射撃	柔道	ソフトボール	体操競技・トレーニング	卓球	ダンス(モダン・フォーク・ソシアル)	登山	なぎなた	軟式テニス	馬術	バスケットボール	バドミントン	バレーボール	ハンクグライダー	ハンドイング	ハンドボール	フェンシング	フィッシング	ボウリング	ボクシング	ホッケー	野球活動(キヤンプ・ハイキング・ボートカヌー・スカル・エイトまで)	野球場	ヨット	ラグビー	陸上競技・運動	レスリング	ワンダーフォーゲル			
反抗的	2	3	40	0	3	0	0	10	9	52	2	20	0	1	1	0	30	2	1	5	0	1	1	1	35	12	32	62	3	15	1	64	1	63	28	61	0	0	23	0	0	0	1	2	2	5	49	1	15	65	2	0	5	
攻撃的	1	3	30	1	2	0	1	8	11	49	2	10	0	0	0	0	27	1	1	8	0	1	0	1	30	5	17	37	1	11	0	41	0	51	13	44	0	0	9	0	0	0	2	0	5	44	0	13	46	2	0	4		
挑戦的	2	4	22	0	2	0	0	2	9	8	46	3	11	0	0	1	0	32	3	1	7	0	1	0	1	34	9	31	56	2	16	1	60	0	49	21	65	0	0	15	1	1	1	0	1	1	6	51	0	13	64	3	1	4
大胆	2	3	35	1	3	0	0	5	10	59	2	19	0	0	1	0	33	5	1	6	0	0	0	1	41	7	39	63	1	9	0	51	0	66	31	63	1	0	15	1	0	1	1	3	1	5	50	1	18	66	1	0	8	
消極的	3	5	53	2	5	0	0	3	11	22	82	2	30	0	1	2	0	57	2	0	15	2	2	0	2	44	19	58	92	3	16	0	119	3	124	43	114	2	0	27	0	1	1	0	3	4	8	73	3	24	88	6	0	13
陽気	3	10	87	2	5	0	0	4	13	29	139	3	49	0	2	3	0	85	5	1	15	2	1	1	2	74	35	82	151	4	21	3	201	3	226	80	200	2	0	47	1	3	3	1	2	5	10	112	2	39	150	6	3	14
明るい	4	12	88	1	5	1	0	3	13	30	139	2	62	0	2	6	0	76	6	1	21	2	2	0	2	67	35	87	158	4	29	2	209	4	219	84	210	3	0	38	0	1	3	2	2	7	9	120	1	32	162	8	3	20
献身的	3	7	42	1	2	0	0	2	4	12	67	3	16	0	2	3	0	36	3	1	11	1	2	0	0	43	20	38	79	2	13	0	100	1	79	41	95	2	1	20	1	1	2	0	3	1	7	42	2	13	89	2	1	7
協調的	2	8	93	5	2	0	0	5	9	32	130	2	52	0	0	5	0	65	5	0	21	2	4	1	0	68	32	69	164	4	29	1	208	3	192	71	181	3	1	40	3	3	3	1	2	4	15	127	2	24	160	3	3	16
協力的	3	4	81	5	1	0	0	4	6	24	93	1	36	0	1	3	0	63	4	1	15	2	4	0	1	63	27	55	120	4	22	0	158	2	140	61	142	2	1	29	3	1	3	0	2	4	14	100	3	22	119	2	1	10
友好的	4	9	97	3	3	0	0	5	10	27	141	5	51	0	0	8	0	76	5	1	21	2	4	1	0	79	35	81	169	4	28	3	216	2	192	73	188	2	1	46	4	2	3	1	3	4	12	133	1	39	150	4	2	13
N	8	21	222	7	8	1	1	10	29	65	330	9	116	2	4	12	0	176	13	1	36	3	5	4	2	198	73	180	436	12	73	4	501	8	471	170	430	4	2	98	5	6	3	2	4	13	22	291	7	70	408	11	4	39

第4節 まとめ—問題点と今後の展望

第1節では古典的なプレイ（遊戯）の理論を応用して、筑波大学生のスポーツ動機（スポーツ参加の動機）をさぐった。その結果、学群別にみると、医学専門学群学生（とくに女子）は休養動機が、体育専門学群学生は代償動機が強いことがわかった。また、学年別にみると、とくに女子において、学年がすすむにつれて余剰エネルギー発散動機が弱まって、逆に休養動機が強まる、という傾向を見出した。このような動機構造を決定づける要因をさぐることが今後の課題となろう。

また、生きがい充実度との関係を見ると、生きがい充実度にプラスに影響するものは、男子では代償動機、女子では学業専従であることがわかった。

第2節では筑波大学生のスポーツ種目選好パターンをさぐった。その結果、スポーツ種目選好は大きく5つの型に分類できることがわかった。そして、それらのうちの4つはマーケティングの分野ではあまり見られず、スポーツ種目選好に特有なものであった。また、上級生（3・4年生）と下級生（1・2年生）の反応プロセスの差により、学習効果をさぐり、53種目中18種目に学習効果がみられた。

マーケティングの分野では、知覚率を高めることで比較的容易に活動率の上昇を予測できると仮定するが、生涯にわたってスポーツ活動が行なえる能力を育てるという目標の下ではそのような予測は難しいものと思われる。それは、提示した53種目のうちの大部分が特異な反応プロセスを示したからである。したがって、スポーツ種目選好における活動率を上げるためには他のどの次元がかかるのかをさぐる必要がある。また、スポーツにどのように参加させるか、生涯にわたってスポーツを行なえるようにするためには、学習者のどのような能力を育てるべきかという問題も今後検討しなければならない。

第3節では学生のスポーツ種目選好とパーソナリティとの関係を見た。その結果、林の数量化理論Ⅲ類により、パーソナリティ特性を4つにまとめることができたが、バットの仮説に示されるまとまりと同一視できるものではなかった。また、それらのまとまりとスポーツ種目とのクロスからは特徴的な傾向はみいだせなかった。

パーソナリティとスポーツ種目との関係に関する研究はこれまでも数多く発表されているが、数量化理論を用いた研究はなかった。しかし、その独創性にもかかわらず、両者の因果関係については問われないままになってしまった。その結果、たとえ非常に積極的な相関関係がみいだされたとしても、あるパーソナリティ特性をもつものに対してあるスポーツ種目の適不適を論じることはできないことになる。また、この問題については、スポーツ種目を行なわせる目的の問題も関っており、今後の研究が必要である。

注1：それぞれの動機はプレイ（遊戯）の理論の諸学説を応用したヴィンショップとウィット（Bishop, D. W. & Witt, P. A., 1970）の手法にならった。このうち、学業専従 Task generalization については、§1.学生のスポーツ動機構造の分析からはずした。

注2：第3学群については、対象者数が少ないうえ、女子の人数が僅かであるので分析を省いた。